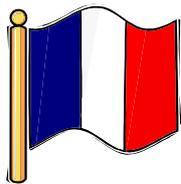


## 「人間的なフランス」・・・進んでいる？それとも頹廃？

飛ぶ鳥は撃ち落とされることが多いのだろうか？先ごろの橋下大阪市長の不倫報道にふと思った。男と女の関係は生きている人間がいる限り存続してきたしこれからも存続していくものである。ただそれが有名人となったとき、マスコミは格好の“売れるネタ”として飛びつき、市民はそれを格好の“井戸端の話題”としていく傾向がある。

市民から選ばれた政治家が私生活面でも清潔であることは理想だろう。でも、男と女の関係にはそれぞれの事情や背景があり、第三者が軽々しく論じられるものでもないだろう。国の伝統や社会事情によってはそのとらえ方は大きく異なっている。

この7月、私は『レ・ミゼラブル』と『三銃士』の文学紀行でパリを訪れるにあたり、何冊かのフランス事情についての本に目を通した。そのなかで出版されたばかりの「なぜ、フランスは一目置かれるのか——プライド国家の流儀」（山口昌子著 産経新聞社）は、視点が鋭くユニークで実に面白かった。



新聞記者生活のうち後半の21年間をパリ特派員として過ごした著者は、政府の政策に対し賛否をはっきり表明し、しばしばデモやストに訴える“誇り高く勝手な”フランス人の国民性について分析する一方、「自由・平等・博愛」の国是を体現するフランス人の魅力についても紹介している。

まず、現在、日本国内でも熱く論議されている原発について：

「フランスで過去『脱原発』の運動が成功しなかった背景には『国防なき国家に独立なし』との認識による核抑止力堅持という国防政策のかなめがある」

「『原発』はフランスの基幹産業である」

「軍事パレードにはもちろん、フランスの基幹産業である軍事産業の装備品がいかに優秀であるかを世界に知らしめる見本市の意味もある」

「フランスは58基の原発を擁する『原発大国』だけに安全には神経を使っている」

等と報告している。

そして「フランス人には『革命の思い出』が遺伝子としてすりこまれているのかもしれない」と：

「フランス人たちは王政、革命、共和制、帝政、王政復古、共和制とめまぐるしい体制変換を乗り越え、20世紀に入ってもドイツによる占領、パリ解放、第五共和制誕生、脱植民地、ベルリンの壁崩壊などの歴史の節目に直面してきた」

と私たちが中学・高校時代に勉強してきた世界史を紹介している。

ほかにも面白い視点と分析が多いが、最初のテーマ「男と女の関係」ではもっと“フランス的”でユニークである。以下、著書からそのまま引用してみよう。

「少子化対策の陰には『人口は国力』とのフランスの基本的な考えに加え、結婚の形態が変わったこともある。70年に新生児のうち6%だった婚外児は、08年には52%と半数を超えた。05年には民法から『婚外児』の文字も消えた。ロワイヤル氏には4人の子どもがいるが、いずれも婚外児だ」

「ジスカールデスタン元大統領には“朝帰り”のスキャンダルがあり、ミッテラン元大統領には隠し子がいた。シラク前大統領夫人は、ハンサムで女性に人気のあった夫のため若いころ、嫉妬に苦しんだと吐露している」

「フランスでは売春斡旋業は禁止されているものの、自らの意思で世界最古の職業と言われる仕事を選ぶのはおとがめなしだから・・・」

「サルコジ氏は在任中に離婚、結婚（しかも3度目）をした初めての大統領。ミッテラン大統領は、就任時からすでに前立腺がんを侵され、隠し子もいたがこの二つの秘密は塗りこめられていた」

「オランド大統領もロワイヤル氏との間に4児がありながら、正式に籍を入れず、新しい夫婦の在り方を示した。現在は『パリ・マッチ』の記者と同居中だ」

——つまり「フランス人は『私生活は問わず』が原則だ」と分析しているのである。



これらのレポートをどう考えたらよいのだろうか？日本に比べてかなりフリーとも思われる男と女の関係。人間的なフランスを“進んでいる”と見るのか、それとも“頹廢に向かっている”と見るのか？

また、フランスがこうだからといって、日本の政治家が同じような状態で良いと言っているのではない。「英雄、色を好む」も一概に否定できないが、日本には日本古来の奥ゆかしい伝統や文化、生き方があり、それを大切にしていすべきだと思っている。

ちなみに、もう30年も前のことだが現役時代に特派員としてパナマに駐在していた時に現地の有力紙の報道に「このパーセントの数字は間違いだ、反対だろう！」と新聞社の編集部を確認したことがあった。

パナマに私生児が増えていることを報告している記事だったが、その中で「正式な夫婦の間で生まれた子供が45%、正式でない夫婦の間で生まれた子供（いわゆる私生児）が55%である」との内容だった。

ふだん私は、ラテン・アメリカの国々では日本に比べて男女間の間が緩く私生児が多いことも目にしていた。でも、いくらなんでもこの新聞報道の数字は逆だろう。「正式な夫婦の間で生まれた子供が55%、正式でない夫婦の間で生まれた子供が45%」ではないのか、と・・・。

電話で確認した新聞社の担当者の返答は、ていねいながら結果的に私の認識が甘いことを指摘する内容だったのだ。世界の一部の国々の実態はこの通りであることも付け加えておきたい。

さて、最後に指導者には少々きつい記述と庶民には少々ゆるやか（過ぎる？）記述を紹介しこのコラムを締めくくりたい。

まず指導者に：「国家は国民を守る——フランスで大惨事が発生したら、国家元首は即刻、三色旗を前に、ラジオ・テレビ演説し、事態の詳細を伝え、『政府を初め当局が全力で国民を守るから安心しろ』とメッセージを発するだろう」



そして 8 月になると政治家を初め企業のトップから一般庶民まで夏休みを取る状態を：「じっとパリのとどまっているのにはちょっとした勇気があるほど、バカンスはフランス人にとって『強迫観念』になっているように見える」

いかがだったでしょうか？

少々お堅い記事でしたが、本来の楽しい文学紀行やエッセイは「名作の舞台を訪ねて」や「気まま随想」で紹介していますので、そちらをご覧ください。